

女装したまりなの弟が
りみりんにメスイキさ
せられる話

脳みそゆでゆで

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夏休み、姉であるまりなの命令でライブハウスCIRCLEで女装しながらバイトしてた俺は、憧れのPoppin' Partyのベース、牛込りみさんに女の子として気に入られてしまう。女の子同士の恋愛が公然と許されてる花咲川で、俺は女の子と勘違いされたまま、りみさんに誘われてしまい――？

(※タイトルに『メスイキ』とありますが、前立腺を用いた絶頂描写はありません。心がメスになっていくという意味でのメスイキなので、このようなタイトルにさせていただきます(いてます))

目次

女装したまりなの弟がりみりんにメスイ	
キさせられる話	1

女装したまりなの弟がりみりにメスイキさせられる話

「あなたウチのライブハウスで働きなさい！」

と姉のまりなが素っ頓狂なことを言い始めた。

「はあ？　なんで」

「人手が足りないから」

「なんでてめえの都合に振り回されなきゃなんねーのかって言ってんだよ」

「どうせ夏休み中はヒマでしょー？　家でゴロゴロしてるよりよっぽど有意義だよ？」

此処であーはいはい、わかりましたというわけにもいかない。俺にも夏休みの予定というものがあるのだ。この夏も友達と一緒にいろんなところに行くつもりだ。山へキャンプに行つて清流で魚釣り。海でパーベキューするのもよい。夢は広がります。だ。——まあ、夢は夢でしかないんだけど。でもいずれは予定が入るはずだ。

「だいたいお前んとこのライブハウスって女の人しか雇わないだろ。俺は男だ」

「女装すればいいじゃない？」

「何ぬかしてやがるんだこの生き遅れ女は？　あ、間違えた。何を言っているのかさっ

ぱり意味が分かりませんのですけどお姉さま」

「こちらもネタは上がってるの。……あなた、Poppin, Partyの隠れオタだよね?」

「なーんで俺がなまっちよろいガールズバンドのファンやんないといけねーんだよ」

「そうだよねー、あなたがガールズバンドのファンなわけないよねー。そう思ってあなたの部屋にあるPoppin, Partyの全シングルCD今度の廃品回収に出そうと思って紐でくくって表にある倉庫に叩きこんどいたけどよかったかな」

「待ってくれ俺のポピパコレクション!」

家を飛び出そうとした瞬間首根っこをむんずと掴まれ止められる。

「尻尾を出したねこのブタ野郎。安心してよ、私が大事なガールズバンドのCDにそんなことするわけないでしょう」

「くそう。てめー勝手に俺の部屋に侵入しやがったな。こういう女が彼氏のケータイ勝手に盗み見してドン引かれるんだよな」

「そのセリフそのまま返すよ。あなたPoppin, Partyが手売りしてるCD、わざわざ私の高校時代の制服勝手にパクって女装して受け取りに行ってたよね。ちなみにこれがその時の写真になります」

「ごめんなさい……俺が全面的に悪かったですうっ……なんでもしますからそれを全世界に配信するのだけはホント勘弁してください……」

「なんで実の姉がそんな鬼畜な所業を展開すると思ってるのあなたは。でもまあ、気持ちわかるなあ。周りの客は全員女性。男の子が一人で入るには勇気が要ったんだよね?」

「はいっ、その通りですお姉さま! でもPoppin' Partyが好きだつて気持ちは抑えることができなくて、前々からお姉さまの着せ替え人形にされてきた俺ならいけるかもつて思つてそれで……」

「我が弟ながら見事な女装スキルだったよ。私以外は誰も気づいてなかったもの。やれやれ、そのスキルとポピパに対する情熱に免じて、寛大なる姉の心で許してあげましょう」

「ありがとうございますお姉さま! では俺はこれにて」

家を飛び出そうとした瞬間首根っこを再びむんずと掴まれ止められた。

「何逃げようとしてるのかな。あなたの変態的所業もさっきの会話でさりげに入つた暴言も何もかも全て許してあげるから、ウチのライブハウスで働きなさいつて言ってるの。ここに雇用関係の書類あるから今すぐ全部書け、今すぐにな」

こうして俺は姉の寛大的な処分により、ライブハウスCIRCLEでこき使わ——働かされることになったのだつた。

これにて俺の夏休みに入るつもりだった予定は全部キャンセル。そのことを友達に

伝えたら、

「まあ俺たち中三だし、受験に向けて夏期講習あるから今年は何もしなくていいんじゃない？」

と別に今年は遊びに行けそうもなかったことが判明した。それを思うと、姉の提案はそう悪いことでもなかったのかもしれない。あくまで、結果オーライってだけの話だけだ。

で、働き始めてみたはいいもの——

「接客はもつと愛想良くね♪」

「掃除やり直し♪」

「もつとキ・ビ・キ・ビ・動・け♪」

はじめてのバイトは思ったよりずっと大変で、苦戦することも多々。姉も周りの目を気にしてか愛想笑いで怒ってくるので、普段よりもずっと怖い。でもお金はちゃんともらえるから、挫けずしつかり働かなきゃな、と思っただけ。別に姉に叱られるのなんて日常だし。

それにライブの裏側を見るのって、ちよつと楽しいかもしない。周りをゆつくり観察してられる余裕なんてないけどな。

女装に関しては、不思議なほど何も問題が起きなかった。つつーのも

「今日から働き始める、私の弟だよっ」

とバイト一日目にして姉が即バラしてくれやがったからだ。どうやらそれも気にならないぐらいライブハウスには人手が足りなかったらしく、へーびつくり、程度で流されてしまった。男がいると力仕事を押しつけられるし、何かと都合がよかつたのだから。

だから更衣室も別だし、男子用便所を使っても不審に思われない。もちろん出演者と客は俺が男だって知らないから、バレずに動く必要はあつた。

それにしても——C i R C L Eは女の人ばかりだ。

スタッフも女性、客も女性、出演者も女性。どこを見渡しても女の人が目に入る。

99パーセントは女の人だ。そこにいる1パーセントの添加物に含まれるのが俺だ。たまに俺以外の男もいるけど、出演者の親族だったり、バンドの関係者だったり、そこに生息してる猫（ちゃんと生えていた）だったりする。

女子校が密集してる特色からか「女の子の街」として知られるこの地域にあるライブハウスは、俺の予想以上に女の子ばかりが集まってくる場所だった。バンドだし、女性つつつてもカッコイイし、もう少しくらい男がいてもいいもんだと思うんだけど。でも、やっぱ来づらいよなあ。

はあ、ポピパ、カッケーバンドなのになあ。俺の通ってる男子校には良さを語り合える奴がいねえ。

と、ぼやきたくなりながら店の前の掃除をしてる俺の視界に、ポピパのロゴが入ったライブTを着た女の子の姿が目に入った。

「あつ、Poppin, Party……」

声をかけるわけじゃなかったんだけど、同士を見つけたかも、という感動で勝手に声が出ていた。必然、女の子がこつちを振り向いた。

「ご存じですかつ、ぽっぴんぱーていー?」

なんかどこか舌足らずで、女の子が口にするPoppin, Partyはひらがなであるかのように聞こえた。

「はい、つてゆーかオレ……じゃなかった、私もポピパのファンなんですつ」

「あなたは、ここのスタッフさん?」

「はいつ、月島つて言います。まあ、まだ一週間も働いてないんですけどね」

なんかどつかで見たことあるような顔――。

「月島さん? まりなさんとおなじ苗字ですね?」

「あつ、姉ちゃんの……妹なんです」

「どうりで、ちよっぴり似てるなあーって思ってたんですよね!」

「つて、牛込りみさんだーっ!？」

「わっ? びっくりしたあ。気づいてくれたんですね。ありがとうございますっ」

「す、すす、すぐに気付けなくて、申し訳ない」

だつてまさかこんなところでバツタリ会えるなんて思いもしなかったから!

「そんなつ、謝らないでくださいっ。わたし地味だから……」

「地味なんかじゃありませんっ。私ライブ観に行ったことないから、ジャケ写でしか見たことなく、それで分からなかっただけですから! それにそれに、テレビに出る人が目の前に現れて、すぐに

『あ、あれ●●だ』つて気づく自信ありますか? まず、現実として認識できないと思うん

ですよ。私は、さつきそうになりましたもんっ」

「そう考えれば、そうなのかも……」

「だからだから、りみさんが地味なんてことは絶対ありませんからっ」

「ふふっ、その……嬉しいです。ありがとうっ」

手渡しのCD買いに行つたとき見たはずだけど、あれはメンバーを直視すらできなかったからノーカン。

今少しでもちゃんと牛込りみさんの顔を見て話せているのは、さつきまで気づいてなかったから、その勢いに任せているだけだ。

「私のほうがもつと嬉しいですよ。りみさんに会えるなんてっ」

「そ、そうなのかなあ……わたし、ふつーの人ですよ？」

「ファンにとつては、憧れの人です」

「そ、そっか。わたしこういうのつてはじめてだから、実感がわかなくつて……わつと、ごめんなさいっ、近いうちここでライブがあつて、今日はその打ち合わせで来てるんですっ」

「あつ……そうですよね」

バンドマンがライブハウスに来ているということとは、音楽関係の用事があるからに決まっている。邪魔をしてはいけない。つてことで、幸せな時間は、あつけなく唐突に終わりを迎えてしまった。

ライブがあるつてことは、また会えるかも。でもこんな機会は、一生ないかも。

そんなこともあつて、俺は生牛込りに会えたという証拠みたいなものをどこかに残したかった。このまま離れてしまうのはどうしても口惜しかった。

「あ、あああのつ、サイン……」

はペンがないから無理だ。

「握手してもらえないでしょうか！」

「あくしゅ？ ……いいですよ。なんて。えへへ、有名人になったみたい」

そうやってはにかむ、俺より一つだけ年上の、背が低い俺よりまだちよつと幾つか身長が下の、そして本人曰く「ふつーの」女の子と、女装している俺は数秒間の握手を交わしたのだった。

そして、牛込りみさんは去ってしまった。

「でへへ」

と、思わず緩んでしまう頬を叩いてキュツと引き締めた。バンドマンをアイドルっぽく見てしまうのは、どうかと思うのだ。そういう理由で Poppin, Party に惚れたわけではない。いくら可愛いからと言ってアイドル視してしまつたら、音楽を素直に聴くことができなくなるではないか。

——でも、まあ、やっぱりというかなんというか。

まだ手に残る牛込りみさんの手の感触を、俺はどうも一生忘れられなくなりそうだった。

そして、Poppin, Party のライブ当日。

当たり前だけスタツフだから忙しくって、ライブなんてともに聴けなさそうだ。

会場の外の受付で、分厚い扉の隙間から漏れ出てくる微かな音を拾いながら掃除。それが現実。

だいたい金も払わずライブを聴けるって根性が間違ってる。

もしかしたら楽屋裏のポピパと話せるかも——って期待も、俺は男だから出演者の楽屋とか近づかせてももらえないし。

「やあやあ元気に掃除してるかな、妹くん」

「まりな……」

こめかみ辺りをゴツリ。

「お・ね・え・さ・ま」

と訂正。

「すまんが今はお姉さまと話す元気ないの。やっと客の入場がすんだからちよつと休みたいの」

「ライブは終わるまでが仕事だよ。まだ始まったばかりだよ。それにあなた、嘘ついてるでしょ」

「嘘なんてついてねー」

「休みたいなんて、嘘」

「嘘なんてついてねーし」

「はいはい、意地悪してごめんごめん」

そう言つて、姉は手を差し出した。

「掃除なら、私がやっておくから」

顎でライブ会場への分厚い扉を指し示した。

「もうすぐ、だよ」

「お、姉ちゃん……」

たじろいだ俺からモツプを強奪して姉は、

「音楽に性別なんて関係ないんだから。まあウチはあなたみたいな客を想定してないから、確かに入りにくいと思うけど。ちよつともつたいたいと思ってるね、あの子たちのライブを見ないのは」

「まさか、それでわざわざ俺をここのバイトに？」

「ほらほら、早くしないと始まっちゃうよ！」

モツプの柄でケツをバシバシ殴ってくる。認めてるようなもんだよな、それ。

「ありがとう、お姉ちゃん」

そう言うと、もう一発強くバシッ。

俺は走り出した。

「ほら、休みたいなんて嘘だった」

——で、肝心のライブはどうだったか、だって？

そりやあもちろん、

最高だつた。

で終わらせちやさすがにダメかな？

でも、俺がどんなに言葉を尽くしたってあのライブを再現することはできないわけ
で。

ただひとつだけ言えることは、俺はあのライブで人生が変わってしまった。

もう一度ポピパのライブを観に行きたくなってしまうわけだ、つまり。

夏休みも終わりに近づいてきたある日、俺はまた店の前で掃除をしていた。

そしていつかの日のように、再び視界に P o p p i n , P a r t y のライブTが目に入
った。

まさか、と思って顔を上げると、そこに牛込りみさんが立っていた。

うわあ、何週間か前ステージ上において、曲の合間に足元のエフエクターをしゃがんで
ちよこちよこいじっている姿が、まるで小動物のように可愛らしかった、牛込りみさん
だ。

声にならずあんぐり見つめていると、

「久しぶりですね、月島さん？」

「ひ、おひ、おひさしぶりでございます、牛込さん」

「あはは……そんなに固くならなくてもいいよ?」

そんなこと言われましても。

「それで今日は店ではライブがなかったはずですが……打ち合わせ何かですか? またライブやるんですか?」

「ううん、今日は違っていて。月島さんに用事があるんです」

「ああ、ウチの姉に?」

「あはは、違う、違っていて」

ちよつと関西弁なまりで笑うりみさん。

「……あなたに」

「わ、私に?」

「うん、ライブ観に来てくれてありがとうって、言いに来たのっ」

俺の心の中で、ちよつとした感動が生まれた。

「こちらこそ、良いライブでしたって、ありがとうございましたって言いたいの、まさか牛込さんから先にありがとうって言われるなんて思ってもみなかったですよ」

「ホント? 楽しませることができてたら、わたしもうれしーなあっ」

「ホントですホント。すっごく楽しかったです。きつとまたライブ観に行きますっ」

「楽しみに待ってますね？」

たぶんその日、俺は男の格好でこの場所に来る。あのライブの日、俺はそう決心した。もう一度ライブが見れるなら、きつと俺は足を踏み入れることができるだろう。こんな女装するなんてこの夏だけで結構だ。CDの手渡し販売に行った時も、こんな恥ずかしい真似はしたくない二度とやるかって思ったものだ。そのせいで、行きたくてもあの一度きりしか行けなかった。

「あのつ、月島さん。下の名前で呼んでもいいかなあ？ 私たち、きつとトシ同じくらい、だよな？」

「下の名前……つ、まあ、私は、中三だけど……」

「ダメ、かな？」

「ダメ、ダメじゃないですつ、ダメじゃない、けど」

俺の下の名前は雄太だった。一発で男だつてバレる名前。ご丁寧に「雄（オス）」つて名前についてるし。だからなるべく触れられなくなかった。ゴクリと唾をのんだ。とつさに、頭の中で名前を組み立てた。

「夕子」ですつ。夕方の夕に、子どもの子で、「夕子」

「夕子ちゃんだね。私のことも、下の名前で呼んでいいよ？ 私のほうが先輩だけど、気にしないで……つて言われても、気にしちゃうかな？」

「牛込さんが、そっちの方が良いって言うなら、そう呼びます……」

「じゃあ、私はそっちのほうが良いかな」

「なら……り、りみちゃん」

めちやくちやむずがゆい。憧れの人と、下の名前で呼び合う仲になれる日がくるなんて、思ってもみなかった。

「夕子ちゃんとはもつと仲良くなりたくなって思ってたんだっ。そう呼んでくれてありがとう」

でも、俺は本当は男だ。そう言いたくなっている自分も心の中に確実に存在した。これ以上、騙しているのが苦痛だった。心が痛くなった。でもホントは、本当の自分を好きになってほしかったのかもしれない。

それに——夕子でいられるのは、夕子でいると心に決めたのは、この夏だけ。もし今日を境目に、ライブの日までりみちゃんに会えないのならば、りみちゃんが夕子に会えるのは、今日が最後の日、ということになる。今日を境目に、夕子はりみちゃんの前から姿を消す。りみちゃんがこんなに言ってくれているのだ。きっと、りみちゃんは寂しく思うはずだ。

「なんで、なんで一度しか会ってないのに、仲良くなりたいたなんて思ってくれたんですか、自分のこと」

「うーんとねえ、うーん……言葉にするのは難しいかなあ。仲良くなりたいうって、直観的なことだと思うから。たぶん、ポピパのことすっごい愛してくれてるのが伝わってきたからだと思う。ライブ中にステージの上から見た表情とか、いい笑顔で楽しんでくれる人がいるなあって、それで夕子ちゃんがいるってわかったの。良い人なんだなーって思ったよ？ あと、それにやつぱり、個人的なことなんだけど、私のこと地味じゃないって言ってくれて、それはすごい、うん、嬉しかった……」

良い人なもんかよ、良い人なもんかよッ、今もこうやって騙してるのに。

「あ、あの……私、わ、たし……」

「俺」って言おうかと思った。本当のことをバラしてしまおうかと思った。でも、どうしても口から「俺」という言葉がこぼれ出てくれなくて、壊れた機械みたいに、「私」というときれときれの言葉を呟いていた。

その時、りみちゃんが小さな手を差し出してきた。

「? ……あく、しゅ?」

「うーん、と、ちよつと、違うかな? でも良かったら、繋いでほしいな」

りみちゃんの言う通りに、俺はその手をとった。すると、ぐいっと引つ張られ、りみちゃんはどこかへ駆け出した。俺は何もわからないまま、手を引かれたまま、りみちゃんに着いてゆく。りみちゃんの柔い手の感触に、ぼーつと意識を吸い込まれながら。

ライブハウスの中へと入った。

「まりなさん、部屋の鍵、貸してくれませんか？」

りみちゃんは受付にいた姉ちゃんに声をかける。

「あ、りみちゃんこんにちわ。鍵だね、ちよつと待っててね」

中で事務仕事をしていた姉ちゃんが、「鍵」らしきものを机の抽斗から取り出すと、はじめ顔をあげてこちらを見た。りみちゃんと手をつないでいる俺のことを。

そしたら姉ちゃんは、あからさまに「ギョツ」とした表情で驚いていた。

「部屋って……あの部屋でいいんだよね、りみちゃん？」

「は、はい……」

なぜだか、りみちゃんは恥ずかしそうだった。

「……まあ、いつか。はいこれ、鍵」

お姉ちゃんから鍵を受け取ると、りみちゃんは再び俺の手を引いて移動を開始する。手を引かれている最中で、姉ちゃんと目があつた。

姉ちゃんは意味深にウインクした。

気持ち悪かった。

そこは、普段俺が立ち入りを禁じられている、出演者たちのエリア。楽屋へ続く扉が

たくさん並んでいる廊下の一番奥に、その部屋はあった。

薄暗いところにある扉の前に立つと、りみちゃんは俺と手をつないだまま、もう片方の手で鍵をドアノブに差し込んで回した。扉を開けると、きいいと古びた音がした。

手探りで探して当てた電灯のスイッチをオンにして灯りがつく。扉を閉めてすぐ、りみちゃんは力チャリと内から鍵を掛けた。それから、靴を脱いだ。俺もつられて靴を脱ぐ。

そこは、女の子の私室のような部屋だった。可愛らしい柄のカーペットが敷いてあって、ちよつと高そうなベッドが置いてあつて。目を移すと、バスルームと看板が掛かった扉があるのを発見する。宿直の人が使うような部屋、なのだろうか。ライブハウスにも泊りがけの仕事があるのだろうか。でも、どうしてこんなところに連れてこられたのだろうか。そんなことより、俺とりみちゃんは今狭い部屋に二人きりなわけで――

なんてことを考えているうちに、あれよあれよという間に、俺は部屋の隅に追いやられていた。

部屋の隅。角つこの部分。正面にはりみちゃん。俺はその三角形の中に閉じ込められている。

とん、とりみちゃんが壁に手をついた。必然、前のめりになつたりみちゃんの身体が、俺のほうにぐつと近づく。体温さえ、感じられるくらいに近く。

何をされているのか、これから何をされるのか、さすがの俺でも勘付いた。

「う、ああ……りみ、ちゃん……？」

瞬間的にのぼせ上がった頭が、意味不明に名前を呼んだ。

「いきなりでごめん、ね？ ……えっちな子は、イヤだった、かな？」

りみちゃんはライブで演奏が終わった時みたいにはあはあと息を荒くしていて、不可思議に赤い瞳をとろとろと潤ませている。

ううん、と首を振るジエスチャーでイヤじゃないと俺は告げる。

「もしかして、って思ったの。ライブ中、夕子ちゃんの瞳が私のことを追いかけているのに気づいて、その、好いてくれてるのかな、って。それでもさっきまでは『もしかして』だけだったんだけど、さっき夕子ちゃんがその、泣きそうな顔になって、言葉につまづいて、何か気持ちを告げようとしてくれてるのを見て、めちやくちやかわいいなって思っつて、我慢できなくなつて……」

少しづつ、顔が近づいてくる。

地味じゃない、全然地味じゃないって。めちやくちや可愛いって。メンバーのなかで一番背がちっちゃくて、背丈とほとんど変わらないんじゃないかと思うくらいゴツイベースを肩からかけて、精一杯演奏しているりみちゃんの姿、かつこよくて、可愛くて、いろんな感情がない交ぜになりながら、見ていた。あのライブ中。惚れていた。あの数

曲の間に、何千回も。

長い間りみちゃんと合わせていた瞳を、俺は眠るように閉じた。一秒も経たないうちに、唇に軟らかい感触が伝わってくる。キス、してるんだ。憧れの人と。

聞いたことがある。この地域では、女の子同士の恋愛が公然と認められているんだって。

だから女の子同士が恋人のように振舞っていても、誰も気に留めたりはしない。常識だつて、責めたりしない。それがこの地域の暗黙の了解だから。ふつーに女の子同士の恋愛があり得る場所。それが此処だから。バイト中にだつて、何度か実際に目にした事実だ。

だからりみちゃんの行動を、俺は自然と理解していた。

だから俺は「ああ、なにもかも終わったな——」と思つていた。できればりみちゃんにこれ以上近づいてほしくなかった。でもそれは無理な話だろう。

でも、せめて終りの瞬間が来るまでは、この夢のような時間を終わらせたくないと思つていた。

「はあっ……はあっ……」

ねっとり二人の間で引いた唾液の糸が、さっきまでのキスの激しさを物語っている。

舌を絡ませあった。お互いの唾液を交換しあった。唇をすすりあった。何もかも現実味のない、夢のような行為だった。

身体はピツタリとくつついていた。りみちゃんの体の柔らかさが、体温が、服越しだからこそ生々しく伝わってくる。

最初こそ身体が接触するのを抵抗したけど、りみちゃんの味を感じているうち思考がぼやけてきて、何もかもどうでもよくなつて許してしまった。

熱く猛りきつてしまった俺の男である印が、りみちゃんのお腹の辺りにぎゅうつと押しつけられてびくんびくんと悶えている。

きつと、それに気づいたからりみちゃんはキスを中断したんだ。

「……男の子、だったんだね」

「ごめん、なさい」

「どうして謝るの？」

「騙してた、から」

「もしかして、さっき何か言おうとしてたのって、これのこと……？」

「はい。でも、嫌われたくなかったから、言えなかったんです。ごめんなさい」

「嫌ったりなんか、しないよ。性別なんて、仲良くなりたいうって気持ちに關係ないもん。夕子ちゃんか男の子でも女の子でも、仲良くなりたいうことには変わりはないよ? ……それと、我慢できないって気持ちにも」

首のあたりに顔を埋められたかと思うと、耳の穴に、電撃的な痺れが風のように忍び込んでくる。ふうー、と息を吹き込まれたのだ。

「あ……いま、びくん、びくん、って動いた」

俺は声にならない叫びをあげながら、りみちゃんの腕の中でただただ悶えていた。

そして、唇が耳たぶに軽く触れている至近距離で、囁かれる。

「問題は、夕子ちゃんが女の子として扱われたのか、男の子として扱われたのかの問題だと思ふなあ。だってさっきから夕子ちゃん、女の子みたいに感じちゃってるから。あそこが固くなってないと、そのまま女の子みたいだよ……?」

再び、ふうーと優しい吐息が耳の中に注がれる。

「あ、あはあつ……♡」

鼓膜の奥にまでくすぐったく届くりみちゃんの吐息は、甘いメープルシロップのような舌足らずな声質を伴っていて、脳みそをとるところに溶かしきってしまう。バカになつたみたい、思わず声をあげてしまった。というか完全にバカになっていた。

一回吹き込まれるだけでも天国に行つてしまふようなほどの快感なのに、何度も、何

度も、吐息を吹き込まれる。

ふーっ、ふーっ、ふーっ、ふーっ。

「あひやあああつ♡ あわあ、はわああ……♡ り、りみひやあんつ……♡」

くすつ——りみちゃんの微かな笑いですら、耳のそばに。それさえ、快感を伴って。

「いっぱい感じちやつてるね。かわいいねえ、夕子ちゃん」

「り、りみちゃ……これえ……ヤバすぎて……頭、おかしくなりそうでえ……」

普段屈辱に感じるはずの「かわいいね」という言葉さえもが、りみちゃんの甘い声にのると全身を痺れさせる電流に変わってしまう。

「うん、わかってるよ？ もう、我慢できないくらいに、はちきれそうだもんね？ 夕子

ちゃんの……お・ち・ん・ち・ん」

ドキリ、と胸が高鳴った。りみちゃんの声が、いやらしい言葉を紡ぎ出したというだけで。しかも耳元で。自意識過剰に、自分の名前を呼ばれたからとでもいうように、下腹部がびくびくと反応した。

「でも、ごめんね？ まだもうちよつとだけガマン、だからね？ ……ベッド、行くつか」

ベッドに仰向けになって、身を投げ出した。そこにりみちゃんが覆いかぶさってくる。四つん這いになって。俺の身体に。

「リラックスしてて、いいよ」

ぷちん、ぷちん。なにかの音がする。りみちちゃんの手が、丁寧に俺の服のボタンを外してゆく音だ。白いブラウスだったから、透けている肌着で男だつて怪しまれないように、下にはキャミソールを身に着けていた。

「もしかして、下の方も……女の子の下着？」

「……一応」

正直に応えた。どうせすぐバレることだ。

「ふふつ、もしかして、そういうシユミがあるの？」

「分からないけど……女の子の下着だとなぜかとききに『俺』って出てこなくなるから、バレにくくなるから、それで……」

「認めたくはないけど、ちょっと魅力、感じてた？」

「口惜しいけど、そうなんだろうと、思う。こんなナリに生まれてきちやっただし、どうせならいつそ……なんて」

「そっか。女の子になりたかつたんだね。今日はいっぱい、女の子にしてあげるからね？ だから夕子ちゃんは、そういう気持ちを否定せずに、女の子としてめいっぱい感じて欲しいなあ」

そんなこと言われたら、ほんとに身も心も女の子になっちゃいそうな気がする。

後戻り——できるのかな。少しだけ怖くなる。

でもキャミソールを胸の上までめくりあげられたとき、俺は自然に女の子を演じていた。

女の子が胸を人目にさらけ出した瞬間のように、羞恥心を覚えていた。胸なんて、水着になるときは当たり前前にさらけ出していることも忘れて。

りみちゃんにじつと見つめられるのが、恥ずかしかった。

倒錯していて、すぐドキドキしてしまう。ダメだ、もう後戻りなんて、できそうもない。

りみちゃんの指が、俺の平らかな胸板に微かにふれる。触れるか、触れないかという絶妙な力加減。

「夕子ちゃん、ここは……感じるの?」

そして、人差し指で円を描き始める。

爪の感触がくすぐったくて鳥肌が出る。

でもその円の軌道は、明らかに「そこ」に触れてはくれないから、じれったく感じる。

「……感じる」

「『ここ』って、どこのこと? ここかな?」

全く見当違いのところを、指で突かれた。

フルフル、と首を振った。

「じゃあ、名前で言ってみて？」

「……乳首」

「ちくび……乳首っていうのは、こくり？」

円の軌道がだんだんと狭まって行って、ある一点の周りをぐるぐるとなぞった。

それでもまだ、肝心の場所には触れてくれない。乳輪に沿って指でなぞるばかりだ。こんなにも近くに迫っているのに。もう少しで触れるのに。

「そっかあ。男の子なのに、女の子みたいに、乳首感じちゃうんだね？」

こくり、とうなずく。誰にも言えないような恥ずかしいこと。俺、りみちゃんに、告白しちゃうてる。

「素直に話してくれた夕子ちゃんには、ご褒美、あげなきやね」

「あつ、はあ……♡」

乳頭の先にりみちゃんの指が軽く触れた。それだけなのにピリツともどかしい快感がほとばしって、女の子みたいに声を上げてしまう。

「まだちよつと触れただけだよ？ それだけなのに声上げちゃって……それじゃあ、指で押しつぶしたり、こねくり回したりしちゃったら、一体どうなるのかな？」

「あつ、ダメつ、ダメりみちゃつ！ あはあつ、ああつ♡……ああああくつ♡」

はしたなくあがつてしまう声。止められないつ。

「片方だけじゃなくて、両方の乳首を……それっ」

くりゆっ♡ くりゆくりゆっ♡ くにくにっ♡ くにくにくにっ♡

はわあゝっ、りみちゃんのか細い指がツ、乳首を蹂躪してるよおっ♡ すごい♡ すごいよお♡ 親指と人差し指で、両方の乳首をつまんでは指の中でくりゆ♡くりゆ♡と転がされてっ。つねられてはきゅっ♡と上に引っ張られてっ。

「どうっ、夕子ちゃん、乳首気持ちいい?」

「ああ♡ いいよお♡ ちくびきもちいいよお♡ ちくび、とつてもきもちいいのお♡ すっごくいいのお♡ おとこのこなにかんじちゃうのお♡ あ、頭、あたまおかしくなっちゃうの♡ あはああっ♡ しゅごひいいっ♡」

「ダメだよ、まだまだ続けるよ、もつともつとーつと気持ちよくなって、心の底から完全に女の子にならなきゃだめだよ? わかったかな?」

ぎゅううっ♡ くにゆっ♡ くりゆくりゆっ♡ くにくにっ♡ くにゆくにゆくにゆくにゆっ♡

「はわああああゝゝゝっ♡ りみひやああああゝゝゝっ♡ はいっ♡ お、おなのこになりますっ♡ りみひやんにちくびいっぱいいいじられてっ♡ こころのおっ♡ しょこから、おにやのこになります♡ なっちやいますうっ♡」

「よくできました♡」

なで、なで。りみちゃんが頭を撫でてくれる。しあわせ♡ もう、おんなのこになっちゃってもいいや。りみちゃんの前でなら、おれ……いや、わたし、おんなのこになっちゃおう♡ ペットでもいい♡

「夕子ちゃん♡ 指だけで……いいの?」

ちゅぷうっ。りみちゃんが口に含んだのは自分の人差し指。トロリと滴るほどの唾液が絡まった指が、糸が引いて口から現れる。その指で——ああ、乳首に近づいてゆく、りみちゃんの下だれで、いっぱいいの、指っ。

「ああ〜ッ♡♡」

先ほどまでとは比べ物にならないほどの。

ぬりゅっ♡ ぬりゅっ♡ くちゅっくちゅっくちゅっ♡

りみちゃんの下だれで、ぬるま湯みたいな生あつたかい温度っ。

指、下だれでぬるぬるでっ。

感度があつ、すごいつ、あがつちやうよお♡

ぬるぬるになった爪で、こしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこしゅ♡

「指によだれをつけただけで、さつきよりもつと感じちやうようになつちやつたね♡

それじゃあねえ……その唾液でいっぱいいの、舌や、唇や、それと吐息で乳首を責めたら、もつともつともーつと感じちやうようになるはず……そうだよね?♡」

想像するだけで昇天してしまいそうになる。そんなことされたらわたし——まずい、まずいよっ。

「ねえ夕子ちゃん？　してほしい？」

「しっ、しっ、してほしいっ♡」

「じゃあその代わり……今からわたしは夕子ちゃんのご主人様だよ？　いいの？　夕子ちゃん、奴隷になっっちゃうけどいいの？」

「いいですっ♡　りみ様の奴隷になりますっ♡　奴隷になるのでしてほしいですっ♡」

「いい子だねえ、夕子ちゃん♡　じゃあどんなことがしてほしいか、ちゃんとご主人様に自分の口で説明してみて？」

「はいっ♡　りみ様の舌で乳首をペロペロ♡　って転がされたり、りみ様のくちびるでちゅっ♡ちゅっ♡　つていやらしい音を立てられながら吸われたりしてみたいです♡」

「へええ、そんなことがされてみたいんだあ♡　夕子ちゃんは、とつてもヘンタイさんなんだね？」

「はいいっ♡　わたしは卑しい奴隷でっ、変態のクソブタ野郎なんです♡」

「よしよし♡　でもわたしはそんな自分のはしたない性癖をご主人様に素直に話してくれるヘンタイ奴隷の夕子ちゃんのこと好きだよ♡　だから今から、夕子ちゃんの乳首にいつぱいえっちなこととしてあげるね♡」

近づいてゆく、りみちゃんの濡れた唇が——私は待ち切れずにそれをぼうつと眺めていて——さっきの蹂躪ですっかりピンと勃起してしまった乳首の先端に——

ちゅっ♡

「あ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

リップキス。

甘い痺れ。

のけぞってしまう身体。

「んふふっ♡」

ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡ ふーっ♡ ふうーっ♡

あついよっ♡ りみちゃんの、吐息あついよおっ♡ こんな至近距離で、ちくびにあたってるとよお♡ チョコレートみたいに甘ったるい、りみちゃんの息がああっ♡

「身体ビクビクさせちゃって……かわいい♡」

小声でささやくように言って、その言葉で発せられる吐息ですら、乳首に触れて、身体ビクビクしちゃうっ。

「じゃあ次は本気でペろペろしちゃうけど……いい?」

「いいです……りみ様のすきに……すきにしてください……♡」

なぜか涙目になりながら言った。

りみちゃんは長い間、息継ぎもしてなくって。ずっと乳首を舐め続けていたりみちゃんの唇から、艶めかしい呼吸音が漏れている。くりゅくりゅ♡♡♡ 依然として両方の乳首を指でこねくり回しながら、微笑むりみちゃん♡ 頬、林檎みたいに紅潮させてっ。「夕子ちゃん、ほんとに可愛くてたまらない……♡」なのに、『ここ』はすっごく凶暴そう……」

りみちゃんにお尻をぐりぐりと押しつけられたアソコが、柔肉のなかに溺れっ——。

乳首くりゅ♡くりゅ♡しながら、そんなことされたらあっ♡

「夕子ちゃん、今わたしのスカートの中に潜り込んで悪さしてるおちんちん……むにゅむにゅ柔らかいところに、当たってるよね？ それがね、わたしのアソコだよ……」

びくん♡ びくん♡

「あっ♡ すごおい♡ 嬉しくなっちゃったのかな？ ビクビクして、わたしのことについてくる……っ♡」

熱くて柔らかい肉ヒダっ、亀頭の先にびったりと貼りついてっ。びくんびくんと肉棒が跳ねると、下着らしき布地が張力を発揮してっ、侵入を遮ってもどかしいっ、すごくっ。そのもどかしさがさらに肉棒を弾ませるっ。

「り、りみひやまのっ、おまんこ……♡ これがつ♡」

「ふふっ、パンツ越しに、おちんちんとおまんこ、キスしちやってるねえ♡ えっちなお

汁同士が染み込んで混ざり合ってゆくのか、わかるかなあ?」

「わっ、わかりますう♡」

先っぽをじわじわと濡らす、この熱い液体がつ、きつとりみちやんの愛液っ。

ああっ、股間の奥の方で、精子が大量製造されてゆくっ。妊娠っ、妊娠させたくなくなるんだっ。私おんなのこになったのにつ。妊娠させたいんだらみちやんのことっ♡

「あっ、いけないんだよ♡ 女の子なのに、おちんちんがおまんこに近づいてよろこんじゃ、ダ・メ♡」

「で、でもお、そんなこと言われてもお♡ おちんちん、よろこんじゃうよお……っ♡」
「でも、奴隷がご主人様のおまんこに種付けなんて、とつてもわるいことだよねえ?」

ぐりぐり♡ ぎゅうぎゅう♡

「あっ♡ ああっ♡ でもっ♡ おちんちんっ、りみ様に種付けしたくて、りみ様を妊娠させたくて、受精させたくて……♡ たまらないですうっ♡」

ぎゅうううっ。乳首に込められる指の力が強く、強くっ。痛みと快感に、喉の奥から悲鳴がこぼれる。人間に跨られた牛馬の如くっ、手綱みたいになつてるんだ、乳首がつ。

「もう……ご主人様に対してそんなヨコシマな願望を持つなんて、夕子ちゃんはホント、ホント駄目駄目ヘンタイ奴隷さんなんだから♡ そんなヘンタイ奴隷さんには、おしおきが必要だね……♡」

りみちちゃんが、ゆっくり腰を持ち上げてつ。離れてゆく、亀頭を優しく包んでいた熱。すくつと膝を伸ばして立ち上がってしまふと、りみちちゃんのスカート内にこもつていた熱も去つて——残つたのは、天へ手を差し伸べるかのように屹立する肉棒が、穿いたスカートに作り出したテント。その頂点とりみちちゃんのスカートの中へ、名残惜し気な透明な糸が引いて、ぷつんつ、途切れる。

「あーあ、おちんちんとおまんこ離れ離れになつちやつた。切なそうにビクビクしちやつてる夕子ちゃんのおちんちん、とつてもかわいそう……。夕子ちゃんも、物欲しそうな表情でわたしの股間見つめちやつて……。でも残念ながら、奴隷は交尾できないんだよ？ 奴隷の相手は、わたしの右手♡ おてておまんこで、せーし無駄打ちの刑、だよ♡」

りみちちゃんは右手で筒を作つて、シコシコ♡ 上下に動かす動作をして笑う。

「そつ、そんな……つ」

「じゃあ、おちんちん顔出して、交尾の準備しようねっ♡」

そしてりみちちゃんは容赦なく私のスカートの裾をチラリとめくつて。

「あはつ、女の子の下着、破けちゃいそうなくらい勃起してる♡」

恥ずかしい勃起おちんちん、女性用下着をパンパンに膨れ上がらせているところ、ご

開陳っ♡

「はい、お尻もち上げましようねえ♡ そうそう、いい子だねえ♡」

私は言うことに従うしかなくてっ。ああっ、ずり下ろされてゆく、最後の布一枚。女の子用の小さな布地だから、脱ぐのも一苦労。本来女の子にないはずの器官が、引つかかってなかなか抜け出せない。

「えいつ、えいつ♡」

それでもりみちちゃんは強引に脱がせようとする。やがて――

びんつつっ♡

「わあっ……♡」

そんな音がするほどの勢いで、屹立した肉棒がこぼれ出る。もう動きを縛めるものもなくなり、外気を突き破る勢いでピンピンに反り返って勃つ肉の塔。

りみちちゃんが、感嘆の声をあげる。

「男の子のはじめて見るけど、すっごい……♡ わたしホラー映画とか好きで、グロテスクなの好きなの♡ バキバキに血管が浮いてて、ピンク色のいやらしい生肉、皮から飛び出ちやつてるよ♡ これが亀頭なんだ……:…:においも強烈で、生臭くてえ……♡」

りみちちゃんの顔が近づいて、亀頭に鼻先があたるくらいの距離、すんっすんっ♡ 鼻を鳴らす音がして。

「はあー……:…:っ、くっさいい♡ 夕子ちゃんのこと、野生の、雄の匂い、しちやつてる……:…:」

♡ 孕ませる気まんまんの、嗅いでるだけで孕んじやいそうなの、すっごい匂い……♡
 あたまへんになっちやいそう♡

♡ つん♡ つん♡ つつう♡

「うっ♡ ああっ♡」

見たことのない生き物を触れるみたいに、おちんちん、指先でなんでもつつかれたり、なぞられたり♡ ぴん♡ 弾かれたり♡

「人の身体じゃないみたい……固くて、ピクピク動いて……このピラピラの部分に触れたら、ビクッて跳ねるのどうして？ ここが感じやすいのかな♡」

♡ つう♡ つう♡ 裏筋を行ったり来たりしてるっ、りみちゃんの指先♡

おちんちんピクンピクン跳ねまくりで♡

「うわあ♡ 先つぽから変な液体が出てきたよ♡ どんどん先つぽのくぼみに溜まってこぼれちやいそう♡ すくってあげるね？」

♡ ぐり♡ ぐり♡ 亀頭の先をほじほじする感触♡ りみちゃんの指が♡

はああ♡ 亀頭をぐり♡ ぐり♡ ぐり♡

「ぬるぬるしてるうっ♡ ねばーって糸引いちやうてえ……♡ 夕子ちゃん、いやらしい♡ こんないやらしいお汗垂れ流しちやうて……♡ このお汗をつけて、さっきの

感じる部分しごいちゃうね♡」

「あっ♡ あっ♡ あああ〜っ♡」

ぬりゅ♡ ぬりゅ♡ ぬりゅ♡

我慢汁なすりつけられるように裏筋っ、指先でこすこす♡♡ おちんちんぴくぴくして、またっ、またっ♡ また先っぽからえっちなお汁分泌しちゃう♡ 勃起さらに強まってええっ♡

「どんどん無限にあふれだしてくるう……っ♡ 涙流してるみたい♡ なんだか……グロかわいいかも♡ おちんちんさ〜ん♡ 指でっんっんされるの、きもちいいですかあ？♡」

っんっ♡ っんっ♡ びくん♡ びくん♡

「頷いてるの？ 首を振ってるの？ どっちなのかな？」

っんっん♡ っつうっっ♡

「あっ♡ ぎもちいっ♡ ああっ……っ♡」

びくんっ♡ びくっびくんっ♡

「あっ、そうだったね〜♡ おちんちんさんは、おまんこさんが恋しいんだっただね〜♡ 苦しくって、切なくって泣いてるんだよね〜っ♡ ちよつと待っててねえ♡ 今から……愛液代わりのよだれ垂らしてあげるからねえ〜♡ よしよし♡」

なで♡なで♡ 頭をなでるように、指の腹で龟头を、なで♡なで♡

それからりみちゃんは、お口の中にいっぱい唾液を作って、唇をおちんちんの先に近づけて——

んれえ〜っ♡

口を開くと、すぼめた舌の先から、とろとろに泡立った透明の雫っ、とろおー♡と垂れてきてっ♡ おちんちんの先に——とろお♡♡♡

「あああっ♡♡♡♡」

あっ、あつたかい♡ おちんちんの先つちよ、とろけちやうくらいあつたかいっ♡

よだれっ♡ りみちゃんのよだれっ♡ 亀頭にやわらかく着地っ、そして竿に沿って、よだれが垂れてゆくっ♡ 金玉袋に向かつてっ♡ 金玉袋にも伝つてっ♡ あつたかい人肌の温度を保つたままベツドシートに染み込んでっ♡

おわらないっ♡ 次々とよだれ、りみちゃんのお口から垂れてきてっ♡ 次々とあつたかいよだれが、おちんちに伝つてゆくっ♡ 陰毛に液だまりがたくさんできちやうほどっ♡ いっぱいいっぱいよだれ垂らされてっ♡ あつたかいりみちゃんのよだれ、どろどろになるほどおちんちんにっ、絡みついちやつてるっ♡

最後にりみちゃんは、自分の右の手のひらに向かつてよだれをたくさん垂らして——広げた指と指の間に糸を引いているべちやべちやの手のひらを、私の目の前で見せつけた。

その手のひらからは、りみちゃんのよだれのっ♡ 甘酸っぱい匂いがっ♡ むわあっ
と鼻先をついて♡ ただの手のひらなのに、すっごくいやらしくてっ♡

「おてておまんこ、かんせえ♡ これにずぶ♡ずぶ♡ おちんちん出し入れしちゃう
ね♡」

「くんっ くんッ♡ ああ♡ りみ様のよだれのおい……はあー♡ はあー♡」

「だめだめっ♡ いつまでも匂い嗅いでたら、せつかくのよだれ愛液かわいちゃうで
しょっ♡」

離れてゆく、りみちゃんの手っ。そしてその手は狭い狭い筒の形になって、そそり立
つ肉棒の先に近づいてゆくっ。

「ちゃんと、おちんちんがおまんこの中に入っていくの、見届けてあげるんだよ夕子ちゃ
ん♡」

まずは亀頭がっ、狭苦しい穴の中へ、潜り込もうとしてっ♡

ぐちゆうっ♡ ぐちゆうっ♡ ぬつぶうっ♡

ぬるぬるのおてておまんこの入口っ、亀頭がっぶれながらっ、りみちゃんのおてての
柔肉、押し分けてゆくっ♡ 入りそうにない狭い穴っ♡ だけど、だけどっ、りみちゃ
んの唾液が愛液代わりになっつ♡

「がんばれ♡ がんばれ♡ おちんちんさん♡ がんばってーっ♡」

ずぶつずぶつ♡

少しずつただけど、だんだん穴の中につ、ぱんぱんになったぶつとい亀頭つ♡ おてて
おまんこの中に姿消してゆくつ♡

「あつ♡ あつ♡ もうちよつとだよつ♡ もうちよつとでつ♡ おまんこのなかに入
れるよつ♡ それつ♡ もう一息だよつ♡ おちんちんさん♡ おまんこさんのなか
に潜れたらつ♡ すつごくかっこいいよつ♡」

ぐりぐり♡ぐりい♡

りみちやんが押し込む力を強くしてつ♡

ぬ♡ぬ♡ぬつ♡ぬぼおつ♡

熱くこもった手のひらのなかの温度に、亀頭の先つちよ包まれちゃううつ♡♡♡

「はあああ~~~~~♡♡♡」

まだまだつ、侵入は止まらないっ♡

四本の指が作るつ、柔らかい肉襞つ♡ 亀頭が一つずつ♡ くぼお♡くぼお♡ 押
し分けてゆくつ♡ 指の部分だけ穴が狭まっていてつ♡ そこを潜りこもうとするた
び亀頭につ♡ 強い刺激が送り込まれるっ♡

ひとつめ♡ ふたつめ♡♡

よだれと柔らかい指肉襞とがっ♡ おちんちに絡まって♡ 絡みついて♡ 裏筋

がこすれてっ♡ カリ首にくいこんでっ♡ たまらない感触♡ 手のひらなのにつ♡

みつつめ♡♡♡ ——— よつつめ♡♡♡♡♡

りみちゃんのちっちゃなおてておまんこにはっ♡ 勃起おちんちん収まりきらなく

てっ♡ よだれ愛液でぬめぬめぐちよぐちよになった亀頭がっ♡ 最後の穴を潜り抜

けっ♡ 裏筋♡ こすうっ♡ こすれてっ♡

ぬぽおっ♡ おててから顔を出すっ♡

「ああっ♡ おちんちん♡ 入っ……ちやつた♡♡♡」

ぎゅうう♡ ぎゅうう♡

「おっ、おほお……っ♡」

竿を力強く締め付けてくるっ♡ りみちゃんのおてておまんこっ♡ ギチギチでっ

♡ ぬるぬるでっ♡ あったかくて♡ なんて♡ なんてっ♡ きもちいいっ♡ 身

体がびくんびくん♡ 震えちやうよおっ♡

「ふふっ♡ おちんちんさん、本物おまんここと勘違いして、びくんびくん喜んじやつてる

よ♡ おてての中でもおっとおつきくなつて、ドクドク脈打って嬉しそう♡ ……哀れ

なおちんちんさん♡ これからせつかく女の子妊娠させようといっぱい作って溜め込

んだ精液、何も無い場所に無駄打ちさせられちやうのにねえ……♡ でも、それでも夕

子ちゃん嬉しそうなト口顔しちやつてる♡」

りみちやんがっ♡ 私の身体に寄り添うようにっ♡ 横たわってっ♡ 耳のそば
 につ♡ 顔を近づけてっ♡

「ほおら……♡ これからおておまんこ……♡ 上下に動かしちやうよお……っ♡」
 ぐちゆうっ♡♡♡♡ ぐちゆうっ♡♡♡

「はああっ♡ はあはあ……♡ うああっ♡ ああああくくっ♡♡♡♡♡」
 りみちやんの手の中でっ♡♡♡♡ ぐちゅぐちゅいやらしい音たてながらっ♡♡♡
 おちんちんぬぼぬぼっ♡♡♡♡ しこしこ♡ されちやつてええっ♡♡♡♡

「はあ……♡ はあ……♡ かわいいよ夕子ちゃん♡ よがる姿がとつてもかわいい
 よお……♡」

耳元で、吐息交じりのねっとりとした声でっ♡ 囁かれてえっ♡ 熱い吐息がっ♡
 耳の中に入ってくるうっ♡

ぐちゅ♡ ぐちゅっ♡ ゆったりとしたペースでおておまんこの中っ♡ 行つた
 り来たり♡

「女の子なんだから……♡ 夕子ちゃんは女の子なんだから……♡ 夕子ちゃんはおん
 なのこ♡ とつてもかわいい、おんなのこなんだよ……♡」

おんなのこっ♡ わたしっ♡ おんなのこなのにつ♡ おちんちんこんなにつ♡
 バキバキにしてえっ♡ りみちやんにしこしこ♡ ぐちゅぐちゅっ♡ しごかれ

てええつつ♡♡

「だから、誰も妊娠させちやダメなんだよ……♡ 本物おまんこの中にはいつちやいけないんだよ……♡ おちんちんが生えてても♡ それは本来の機能を果たしちや、ダメ♡

こうやってずっと、ずっと♡ 一生♡ 夕子ちゃんが死ぬまでずっと……♡ 偽物のおてておまんこに精液搾られ続けるの……♡ 自分の手でやっちゃダメだよ♡

夕子ちゃんはおまんこの奴隷なんだから♡ ご主人様の許可なしに勝手に射精しちや、ダメだよね？♡ 夕子ちゃんは今からずっと、そういう生き方をしていくんだよ♡

……夕子ちゃんはおんなのこで、わたしの奴隷なんだから♡ わかった？♡

ふう〜っ♡ ふう〜っ♡ 耳の穴ふーふーされてっ♡ 体じゆうぞわぞわとした快感が走り抜けてっ♡ おちんちん♡ しこ♡ しこ♡ ぬるぬるのおてておまんこの中何度も往復してっ♡ もうっ♡ 何もかもどうでもいいよおっ♡

「はいいっ♡♡♡♡♡ わかりましたあ♡♡♡♡♡ これからわたしはっ♡♡♡♡♡ おんなのこととしてっ♡♡♡♡♡ りみ様のどれいとしてっ♡♡♡♡♡ いきていきますうっ♡♡♡♡」

「すっごくいいお返事♡ ご褒美をあげないと、ね？♡」

ちゅっ♡

耳の先っちよにつ♡ ぬめりを伴った♡ 唇が触れっ♡

「……これからお耳のなか、舌でお掃除してあげる……♡」

ああー……んっ♡ はむはむ♡

お耳のさきっちよ♡ 唇でっ♡ はむ♡ はむ♡ って♡ 甘噛みされてりゆうっ♡

♡ り、りみ様にいつ♡

「ふうう♡ ふう〜っ♡ れるっ♡ んれえええ……♡」

湿った吐息っ♡ 耳をかあつと熱くしてっ♡ お耳の周りの部分っ♡ 舌がなぞっ♡

てっ♡

「恋人を抱きよせるみたいに……肩に腕、回しちゃつてもいーよ……っ?♡ あ……は

む♡ れる、んれろれろ♡」

ぎゅってりみ様を抱き寄せる。やわらかい、りみ様の肩——♡ 身体の熱がぐっ近く

強くなる♡ 腕を挟み込んでいる、りみ様のあたたかな膨らみ♡ ちっちゃいけれど、

張りと弾力があつて、とつてもきもちがいい♡ 石鹸のいいにおいが——発情した女の

子の香りがむわつと立ち込めて、鼻から脳みそとかしていく♡ りみ様♡ りみ様りみ

さまりみさまあ♡♡♡

「はあああっ♡ り、りみさまあ♡ りみさますきい♡ りみさますきなのお♡ しゅ

きっ♡ りみさま、りみさまあっ♡♡♡」

ますますぎゅっ♡♡ 抱き寄せる強さ抑えがきかなくなつてっ♡♡

りみさまはわたしの耳のあなっ♡顔を埋めて♡はあーっ♡はあーっ♡息苦
しそうにっ♡興奮してるのが直にっ♡直に伝わってくるっ♡舌だけを必死に動
かしてっ♡

「……んれるう♡はあっ♡れるれるっ♡んれえ♡ちゆるっ♡じゆる♡じゆ
るるるうっ♡……っはあ、はあ……♡ちゅむっ♡ちゅうっちゅっ♡」

耳のくぼみを丹念にほじくる舌の感触がっ♡だんだん奥へとっ♡穴へと迫っ
てっ♡穴の中につ♡入ってゆくうう♡穴を埋めるようにっ♡りみ様のよだれ
まみれの舌肉♡ぐりっ♡ぐりゆっ♡こじいれられるように♡入っへええっ♡
ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっ♡おてておまんこの出し入れが加速
するっ♡

お耳の穴もっ♡ちゅぼっ♡ちゅぼっ♡水音っ♡水音っ♡舌が出たり入っ
たりしてるっ♡お耳犯されてるっ♡りみちゃんにお耳の穴ずぼずぼ犯されて
るうっっ♡♡

ほぼ丸裸にされてる生足に、りみちゃんの脚がぎゅって絡みついてるっ♡ものすご
い力でっ♡決して逃してくれはしない強さでっ♡ごしごし♡太股のあたりに何
か柔らかいもの♡こすりつけられてっ♡りみ様っ♡盛りが付いたようにっ♡
腰動かしてっ♡私の脚でっ♡オナニーしてるんだ♡りみさまもっ♡りみ様

も興奮してるんだっ♡

「んはあっ……♡ んはあっ……♡ んへろっ♡ れれるっ♡ はああ♡ ああっ♡

んうっ……♡ へるへるれるるる……♡♡ じゆるるっ♡ はあっ、はあっ♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡♡♡♡ しこしこしこしこしこしこしこしこ

し♡♡♡♡♡♡♡♡

「うっ♡ うあっ♡ しっ、搾っ♡ しぼりっ♡♡♡♡♡♡ とらへええっ♡♡♡♡♡♡ あああっ

♡♡」

「れる?♡ れちやうの?♡ ゆうこちゃんっ♡ しやせいしちやうの?♡ ざあめん

どびゅどびゅーって♡ おちんちんさん♡ おてておまんこにしごかれてなさけない

無駄打ちしやせいしちやうのお?♡♡♡♡」

「れちやううっ♡ れちやうよおっ♡ りみひやまあっ♡ なさけなくっ♡ おててお

まんこでへえっっ♡♡♡♡♡♡ おちんちんだまされへえっ♡ れちやいますうっ♡ せー

しでちやいますうっ♡♡♡♡」

「いいよっ♡ 夕子ちゃんっ♡ イっていいよっ♡ イっちやえっ♡ いっばいいいっば

いどびゅどびゅって♡ 金玉のなかにあるものぜんぶはきだしてっ♡♡ わたしを孕

ませようとして作ったわるいわるい煩惱子種っ♡ おてておまんこのなかでっ♡♡

虚しくっ♡♡ せーしっ♡♡ おもいつきりイっちやえっ♡♡♡ 無駄打ちしちや

せーしびゆくびゆく出てきて♡♡ 止まらなくて♡♡ 金玉のなかつ♡♡ すつからかんに尽き果てるまで何度もなんども♡♡ 張り裂けそうに痛くなつてもまだ出てきて♡♡♡ 限界まで♡♡ 限界まで打ち出して♡♡♡

「あーあ♡♡ 本物おまんこの中にびゆくびゆく♡ びゅーびゅー♡♡ 出せてたら絶対わたしのお腹に赤ちゃん出来たのにな……♡♡ こんなに元気なせーし♡♡♡ っばいっばい無駄にしちゃって……♡♡ かわいそうなせーしくんたちだね♡♡♡ っ おててのなかで卵子求めて元気に泳ぎ回ってる♡♡」

——ようやく。ようやく射精が途切れて。長い長い夢が覚めたかのように、俺の視界はぼやけていた。

その向こうでりみちちゃんが手のひらをこちらに向けて、わたし——いや、俺に広げて見せる。白濁とした精液でどろどろにまみれきつた。その手のひらを。これを、わたし、おれ、が？

煩惱が台風に吹き飛ばされたようにすつきりとし始めた頭の中で、さつきまで繰り広げられていたことが蘇る。誓ったことも。いつもは楽器を握る、りみちちゃんの手のなかにを穢したことも。

同じ枕で隣に横たわる、りみちちゃんの赤い瞳と目が合った。息がかかるくらいの至近距離で。

それはいつもの、小動物的にはわはわ動揺しているりみちゃんとは思えない、ゾクリとする笑みを浮かべて――

「夕子ちゃん……このキスで……夕子ちゃんはもう、正気を取り戻せない、おんなのこになっちゃうよ……」

唇が近づいてきて――

やわらかなベッドに吸い込まれるように。わたしの全身の力は抜けていった。